

領仕と見たれば、昔は今云ふ白銀町へかけ、都て安江木町と呼びたりしと聞ゆ。

○安江木町來歴

舊傳に云ふ。昔安江村の村落、今云ふ安江町の地邊にありし比は、安江木町の地は上安江村の地内にて、其の頃此の地に材木商人多く居住し、宮腰より運送する材木共をば、今いふ古道の揚場より此の地へ運送なしけり。故に安江の木町と稱し、遂に町名とはなりたり。袋町鍋屋伊兵衛傳にも、昔は安江村に居住しける處、安江木町の地へ出で材木商賣を爲し、後袋町松任屋勘兵衛の家・商賣を譲り請け、藏宿商賣をなしたりといへり。按ずるに、慶長八年四月利長卿在判の泉野新町定書に、材木商賣の儀、自今以後當町一所にて可改之事。と載せられたり。右定書にて見れば、慶長年中は諸材木の改所は、泉新町一所のみなりしかど、元和年中に成りて、宮腰口および淺野川下口にも材木の改所を置かしめられしにや。元和二年十一月宿々傳馬役定書に、金澤之内卯辰之木町・宮腰口之木町・森下町の末金屋町、五間に壹間之可爲御役之事。とあり。右卯辰之木町

は後にいふ四丁木町也。宮腰口之木町は即ち安江木町にて、安江木町は安江の木町といふべき町名也。右兩町共にそのかみ材木商賣人多く居て、材木の改所なりしゆゑ、木町とは呼べるなりとぞ。按ずるに、三壺記に、元和六年十二月廿四日の夜、金澤御城中より出火、本丸の館屋形悉く燒亡す。御作事奉行辻助左衛門・松江次郎兵衛率りて、雪中に作事取合せ、正月下旬にはや建家に成り、三月の中に障子・ふすまの繪やうまで出來し、卯月上旬に移徙相濟みけり。とあり。城内冬季の作事に、僅か三ヶ月にて落成せしもの、是材木の用意を甚だ手厚になし置かれし故なるべし。

○越前屋佐助傳話

續咄隨筆に云ふ。安江木町に越後屋佐助といふ道具商人あり。京都本願寺へ參詣いたし、夫れより歸路に所々見物せんとおもひ、大坂へ下り、ふと虎屋といへる饅頭屋の事を思ひ出し、日頃饅頭好なるゆゑに、逗留の内或日彼虎屋の店へ立寄り、爰許にて至つて大き成る饅頭はあたひいか程にやと尋ねけるに、主答へて云ひけるは、此方にては格別大

きなる饅頭はなしといへども、あつらへ給はゞ、いか程にても出來すべしといふ。さらば金貳歩に一つの饅頭二つ拵へ呉れられんやと云ひければ、亭主に驚き、先づくはへ御上り候へとて、茶・煙草盆など出し、今日は出來不申候。明日にてはいかゞといふ。佐助明日は何時比に出來致すべきやと尋ねければ、壺比迄には急と出來申さんといふ。さあらば壺頃參らん。其節宜しき茶を煎じ呉れられよとて、金子一兩渡し、北久太郎町の旅宿へ歸りぬ。虎屋には跡にて何れも打寄り、扱々珍敷あつらへ物、昔よりかやうなる饅頭は致せし事なし。如何せんと家内打寄り相談するに、何れもあきれる許なり。明日の事なれば捨置かれずと、家内残らず手傳にて、饅頭を拵へる用意をなし、扱翌日漸く出來せしに、壺頃に成り、越後屋佐助虎屋へ來りけり。亭主出迎へ、只今むし上り居たり。先づくはへ御上り被下とて、二階へ請じ、追付け指上可申、暫く御待ち下されとて、取肴にて酒出すといへども、元より下戸なれば給はらず。早く饅頭を出されよといふ内、宜しき煎茶を出し、扱て御眺のまんぢうとて、一つ蒸上りのまゝ大きな

戸板にのせ、大男三人にて持出でけり。其の大き壺貳疊數程ありけり。佐助大に悦び、扱も宜しく出かされたり。さらば喰はんとして、彼大饅頭を片端より喰ひ懸けしに、家内の者共見物して、只肝を消す許り也。その体、諺にいへる鬼の蚊を吞む如く、暫くの内に喰仕舞ひける處へ、今一つの分むし上りたりとて持出づるに、佐助いひけるは、此の分も喰ふべけれども、夫れにては面白からず。宿まで持行き宿の者共にも見せ度し。細引を貸し呉れられよといふ。安き事也とて、細引三筋取出し、彼の饅頭を十文字にくくり、人足にて持たせらるべきやと尋ねけるに、佐助申しけるは、我等少し力に覚えあれば、一人して持行くべしと、何茂へ一禮のべ、彼饅頭を背負ひ、虎屋を出でけるに、往來の見物人山の如く、漸く北久太郎町の旅宿へかへり、件の饅頭をどうとおろせし音に、家内大きに驚き立出で見れば、家一ぱいの大饅頭。皆々仰天して、是はいかゞと尋ねれば、佐助始終を物語りし、是は何れ茂へのみやげとぞいひけり。借々神武天皇以來のまんぢうなりとて、町内へ人を廻しけるに、我もく見物に來り、肝をけしてぞ歸